

10年思考[↑]で

自己投資を実現するスキル戦略

うまくいく

滝川 徹 ◆ 著

Takigawa Toru

 PanRolling

はじめに

「MBAで学んだ中で最も役立ったのは『10年先の目標を考える』ってことだったよ」

事業を日本の大企業に売却してイギリスから帰国した友人と、丸の内でランチをしていたときの彼の言葉だ。高校の同級生だった彼は、大学卒業後にボストンコンサルティンググループに入社。MBA留学後、キャリアを重ねてスタートアップのアジア統括責任者となり、同事業を売却に導いた。私の友人の中で最もキャリアで成功している一人だ。そんな彼から、冒頭の発言が出たことに、私は驚いていた。偶然にも、執筆を終えようとしていた本書と同じコンセプトだったからだ。

学生時代から目標を達成し続けてきた彼は、10年という単位が目標を考える期間として最適だと私に説いた。それ以上だと長すぎて現実味がなくなり、それ以下だとあまりにも短期的な目標となってしまうからだという。

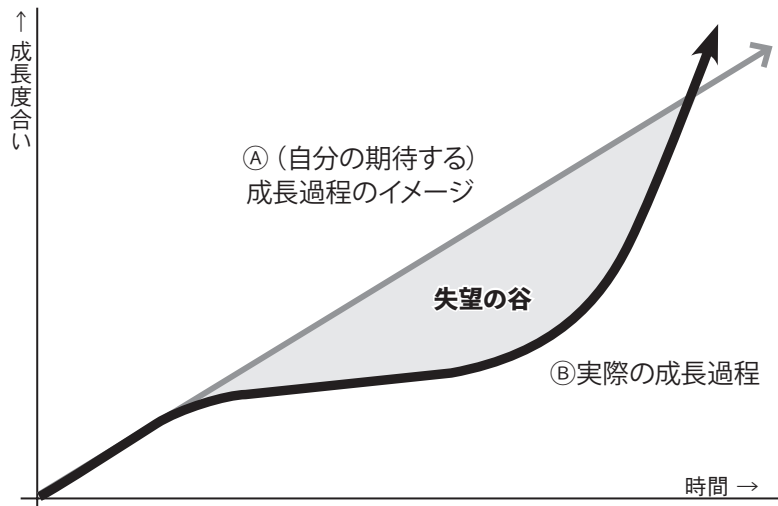
本書の執筆にあたり、数多くの成功者のインタビューや文献にあたったが、大きな目標・成果を達成するには10年がかかる。そう主張する人も多かった。MBAでも目標を10年と考えるように教えているのも偶然ではないのだろう。理由は本書でじっくり解説するが、「10年思考」は間違いなく目標達成のベストのアプローチなのだ。

一方で、10年先の目標を考えたとしても、具体的にそれをどう日々にと落としこめばいいのか。それがわからないと、努力を続けていくのはむずかしくなる。資格試験の勉強なら、毎日何ページ勉強すればいい。そう単純にイメージできるかもしれない。だが10年後に、「会社を辞めて好きなことを仕事にしたい」「自著を出版したい」、あるいは私の友人のように「海外で活躍するビジネスパーソンになりたい」。こうした目標を立てた場合、今日から何を・どのように取り組んだらいいか。具体的に計画を立てて実行し続けられる人は稀有だ。多くの人は目標達成までの道のりが見えず、その結果、努力することをあきらめてしまう。努力し続けても、目標を達成できる保証がない。失敗して時間を無駄にしたくないから、努力しない。そう考えるわけだ。

多くの人は目標達成を考えると、直感的に達成までのロードマップ＝正解・攻略法がある。そう考える傾向にある。学生時代、勉強やスポーツで成果を出した人ほどそうかもしれない。やればやるほど成果が出るし、目標達成までのイメージも描きやすい。目標達成とは、ロードマップを描いてそれを達成するもの。そう考えるようになるのも自然だ。だが問題は、10年先のような大きな目標の場合、その大半が事前にロードマップを描けない点にある。世界的に有名なポッドキャスト番組を運営するリッチ・ロールもそう語る一人だ。

彼は20代で深刻なアルコール依存症に陥り、飲酒運転による逮捕、人間関係の破綻など、人生のどん底を経験した。そこから約10年かけて依存症を克服。40歳を過ぎてから、水泳10km、自転車420km、マラソン85kmを3日間かけて競うウルトラマン（トライアスロン）に挑戦。2009年の世界大会では初日から10分以上の差をつけてトップでゴールするなど、その活躍はアメリカのCNNをはじめ多数のメディアで注目された。そんな彼も、依存症克服に歩み出したときは、自分の

【図1】 目標達成に立ちはだかる「失望の谷」



私たちは直感・本能的に、この変化の軌跡を理解できない。だから多くの人は「失望の谷」で挫折してしまう。期待①と現実②のギャップに失望し、先が見えなくなる。そうして、最後に訪れるブレイクスルーを待たずにあきらめてしまふのだ。

人は未来の見通しが見えないと、動けなくなる性質を持っている。目標達成までの道のりが途方もなく大変に感じると、私が「心理的ハードル」と呼ぶ、心理的抵抗が生まれるからだ。

人の脳は予想外の危機などに備えて、基本的にエネルギーをセーブする仕組みとなっている。そうして、面倒くさそう、大変そうと感ずることを本能的に避けようとする。大変そうな仕事や作業に取り組むときに、「やりたくない」と感じるあの感覚を思い出してほしい。あれがまさに、心理的ハードルが生まれている状態だ。こうしたときは思うように実行できないは

人生がどうなるか。未来は全く見えなかったという。彼はそのときそのときで、今できることを精いっぱいやり続けた。「よし、これをやった。次は何をしよう」「わからないけど、これをやってみよう」。そんな感じで、目の前にあらわれる小さなアクションを積み重ねていった。その過程で道のりが少しずつ見えてきて、到底達成できないと思えた依存症克服を果たせたという。

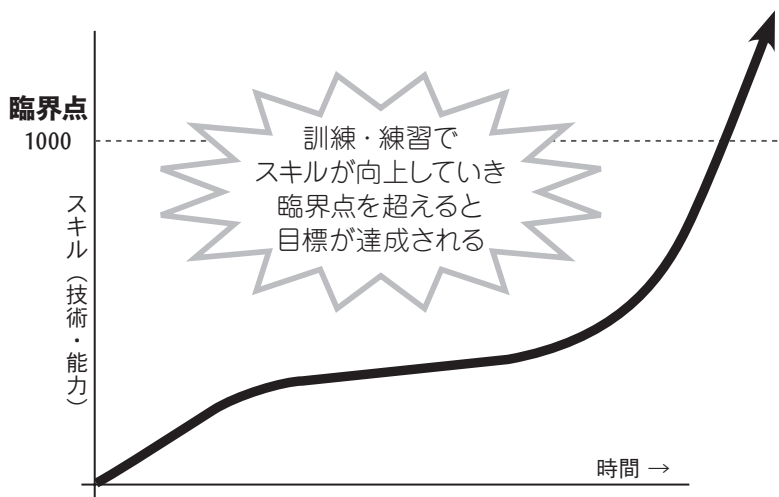
私自身もふりかえってみれば、同じだったように思う。私は激務とされる大手金融機関で残業ゼロの働き方を達成し、会社員を続けながら4冊の本を出版した（1冊は中国語に翻訳されて台湾でも出版されている）。残業ゼロにせよ、出版にせよ。いつか達成したい。そう思ったものの、そのときの自分には到底達成不可能に思えた。

私がやったことはリッチと同じ。ビジネス書を読み、自分にもできると思えることをやってみた。ブログをはじめた。未来までの道のりは全く見えなかったが、今の自分にできる小さなアクションを積み重ねた。それを10年以上続けたら、夢が叶っていた。そんな感覚だ。道中あまりにも先が見えずに絶望して、あきらめそうになったことも何度かある。それでも私が努力を続けることができたのは、当時の私が「10年思考」の最後に訪れる、急激な変化・ブレイクスルーの仕組みに気がついてきたからだ。どうということか。説明しよう。

10年先のような大きな目標を達成するとき、私たちは直感的に次ページ【図1】の①のような成長推移を頭に描く。やることを決めて、努力を続けていけば順調に成長し、目標を達成できる。そう考える。だが実際の成長曲線は、②のような軌跡を描く。

見てわかる通り、その過程は低空飛行の時期が続く、最後の最後で急激な変化を遂げる。しかし

【図2】 臨界点までの心理的ハードルが挫折をまねく



方、その戦略を1日単位の実行計画にブレイクダウンする方法を提案する。年齢を切り口とした「人生の4ステージ」という概念を示し、それぞれのステージに合った戦略を立て、1日単位でどう計画を立てればいいのか。私が10年以上セミナーで教えているタスク管理の考え方をもとに具体的に提案する（ちなみに5章はポータストラックだ。楽しみにしてほしい）。

私はもうすぐ43歳になる。ここまで生きてきて思うのは、「10年あれば、人生は劇的に変えられる」ということだ。

多くの人は1日にできることを実際より多く見積もり、10年でできることを少なく見積もる傾向にある。人は長いスパンで物事を捉えるのが苦手だ、【図1】の⑧の軌跡（最後の急激な変化）を直感的に理解できないからだ。多くの人はこの最後に訪れる急激なブレイクスルーを引き起こす鍵が「時間」だと知らない。1日たった30分でも、

ずだ。

このように、心理的ハードルが生まれると私たちは思うように行動できなくなる。逆に言えば、心理的ハードルにうまく対処できれば、私たちは思うように行動できるようになる。努力も続けられ、目標も達成できる。つまり、私たちが考えなければいけない問いは「どうすれば心理的ハードルにうまく対処することができるか」なのだ。本書はこの問いに解を出したものと看做す。

では、どうすれば心理的ハードルを攻略できるのか。鍵は大きく言うと2つある。ひとつは、目標達成までの捉え方を根本的に変えることだ。

本書では目標達成のプロセスを「スキル」という全く新しいレンズ（概念）を通して理解することを提案する。目標達成はそれが勉強であれ、スポーツであれ、ビジネスの目標であれ、その本質は訓練・練習の積み重ねによる成長により、次ページ【図2】のようにスキルが上達して、ある臨界点を超えることにある。ここでのポイントは、**臨界点（1000）を超えない限り、スキルが999まで上がっていても目標を達成できない点にある。**

目標達成をスキルと捉え、こうした本質を理解していないと、心理的ハードルは攻略できない。本書の1章と2章では、このスキルという概念の本質を紐解く。

心理的ハードル攻略のもうひとつの鍵は、脳の2つの機能を知り、それぞれの扱い方を理解することだ。脳には「**理性の脳**」と「**衝動の脳**」の2つの機能があり、心理的ハードルは2つの脳が対立するときに生まれる。この仕組みを理解できれば、自ずと解決策も導かれる。どうすれば対立を解消し、心理的ハードルを攻略できるのかを3章で説き、続く4章では目標達成までの戦略の立て

10年という時間がブレイクスルーを引き起こし、驚くような成果をもたらすのだ（この根拠とメカニズムは2章に詳しく書いた）。

私も現在、毎日30分、小説を書く時間を持つようにしている。ビジネス書と違い、小説を書くのははじめてで、全く勝手がわからない。パソコンの画面を30分見て1日が終わる日もある。正直、10年かかって出版できる気はしない。それでも、私は取り組み続ける。直感的には理解できないが、10年という時間の積み重ねがブレイクスルーを引き起こし、やがて信じられない成果につながる。このことを、過去の経験から確信しているからだ。

40年生きていると、夢や目標、人生をあきらめている人はまわりに多い。だが、希望はある。1日30分でもいい。今日できるベストを尽くす。それを10年かけて積み重ねていく。そうすれば、今の君からは想像できない未来が待っているのだ。

さて、前置きはこれくらいにして。そろそろ本編に入ろう。
それではまた、巻末で！

滝川 徹



目

次

第1章 超加速時代のあえての10年思考

《“AIで効率”よりも“長期視点”がカギ》

そもそもスキルとは何か？	18
スキル習得は練習あるのみ？	21
AI時代のスキル	24
成功の本質と目標達成	28
大人になつての全ベツト戦略	29
オールイン戦略と10年思考	32
10年思考のメリット	35
時間視点の質と量	36
ハードに集中か、スマートな時間使いか	38
第1章まとめ	41
COLUMN 私の読書術	42

第2章 スキルの本質

《価値があるものを手に入れるには時間がかかる》

成長スピードの見誤り	47
習慣がスキル習得を左右する	48
RPGに見るレベル上げ	49
先回りして挫折を阻止するスキル選び	51
お金という現実問題	54
お金とスキルの関係性	55
スキル選択への助走	58
スキル選びの基準	60
天職がわからない	62
興味があることに取り組む	64
得意・適性があることに取り組む	68
やられずにはいられないこと	71
第2章まとめ	74
COLUMN 英語の効果的な学習法	75

第3章 なぜ着手できないのか——心理的ハードルの正体を紐解く

《なぜ着手へのハードルは高いのか》

2つの脳が対立して生まれる葛藤	81
しなくてもいいが、してはいけない？	83
ケーススタディ	85
先延ばし解決の行動原則	90
応用編	102
最初から完璧を目指さない	104
第3章まとめ	106
COLUMN 毎日8時間寝ると人生が変わる	107

第4章 どうすれば実行できるのか——人生の4ステージと実行計画

《ライフステージ別に考える》

ライフステージごとの行動戦略	111
----------------	-----

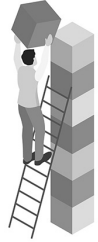
第5章 より良く生きるためのスキルとは

《より良く生きるとは》

成功の本質	167
プライドの影響	170
エゴを捨てる	172
自分は世界を正しく見れていない	177
欲とトラウマと依存症	178

STEP ① 年齢を軸とした「人生の4ステージ」	111
STEP ② 自分のステージに合った「戦略」	117
脳の特徴を活用した意志力の強化	126
STEP ③ 戦略を1日単位の「実行計画」にブレイクダウンする	127
優先順位をつければ時間は足りる	153
三日坊主は高いハードルから起こる	155
第4章まとめ	159
COLUMN 暇な時間の有意義なつぶしかた	160

第1章



超加速時代の あえての10年思考

参考文献
200 196

おわりに

過程とゴール
すたれるスキル、不変のスキル 185
第5章まとめ 192
COLUMN A-1が進化しても、必要なスキルは変わらない 189
193

〳〵Aで効率〳〵よりも〳〵長期視点〳〵がカギ

高校3年の受験期に、前触れもなく急に成績がグンと伸びた時期があった。

それまでの模試の合否判定は、常にDかE。高校生活の中心だったテニス部を引退してからは勉強に専念すると決め、毎日猛勉強するも成績に変化の兆しは全く見えず……。勉強量と結果の落差に絶望しそうになったが、「受験の結果が人生を左右する」と思いこんでいた私は、とにかく必死に勉強した。つらいと感じる感情を押し殺し、ひたすらがんばり続けた。そうしたところ、ある日不思議なことが起きた。

11月頃だったと記憶しているが、模試の結果が返ってくると、早稲田大学と慶應義塾大学の判定が突如Bになっていた。私は目を疑い「おお！」となったものの、正直まぐれだと思った。だが不思議とその後も結果は変わらなかった。あまりにも唐突な変化で実感は湧かなかったが、どうやら私の学力がアップしたのは間違いなさそうだった。実際、その後私は慶應義塾大学の経済学部と商学部に合格した。

実は、このとき体験した急激なブレイクスルーは、少し前にテニスでも経験していた。試合になると極度に緊張して思うようにプレーできなくなる私は、高校生活の大半、思うように勝てずに苦しんだ。それこそ、いつあきらめてもおかしくない心理状態だったのは間違いない。しかし当時の

私にはテニスが生・存・に・不・可・欠・な・っ・て・い・て、その選択肢は自分の中に生まれなかった。

幼い頃から自己肯定感が低かった私は、テニスと出会う前、まわりとうまく溶けこめずに苦しんでいた。いつも自分だけ、どこか人と違う。そんな感覚があり、学校でもクラスのみんなとつながっている感覚が持てずにいた。自分には「居場所がない」。そう感じるのだ。

そんななかテニス部に入り、テニスがまわりより上手くなると、そのモヤモヤが解消した気がした。メンバーも自分に一目置いてくれる。自分に自信と誇りを感じられるようになった。テニスのおかげで、私はなんとか息苦しい人生を生き抜けるようになったのだ。

単純な私は、もっとテニスが上手くなれば、もっとまわりから認められ、もっと自信と誇りを持つようになる。そうすれば、もっと人生が良くなる。そう考えるようになった。だからこそ、感情を押し殺してがんばり続けることができたのだろう。

その結果、最後の最後で、例の瞬間が訪れた。高校3年生の最後の県大会予選。私はあるきっかけで、試合で思いどおりにプレーするコツを掴む。そのおかげで、今まで勝てなかった予選を勝ち抜き、県大会に出場する。団体戦でも大事な試合で勝利し、チームに貢献することができた。私は決して名選手ではなかったが、最後の最後で満足のいく結果を残すことができたのだ。

この突如訪れる急激な変化・ブレイクスルーは一体なんなのか。この謎を紐解く鍵になるのが、本書のメインテーマである「スキル」という概念だ。その本質とブレイクスルーの秘密については2章でくわしく見ていくが、ここではまずスキルとはどんな概念なのか。なぜスキルの概念を理解

までより真剣に見るようになって、なんとかいい部分を盗んでやろうと必死で喰らいついた。自分たちの漫才のスキルの向上に、全神経を注いだ」『復活力』（幻冬舎 より）

M-1で優勝したとき、彼らは「無名からの勝ちあがり！」などと騒がれ、ポツと出の若手のように言われた。しかし彼らのコンビ結成は1998年。才能もあつたのかもしれないが、彼らの優勝は10年近くスキルを磨き続けた結果だとわかる。

ほかの例をあげれば、作家は書くスキルを極限まで高めた人たち。YouTubeやTikTokをはじめとした、SNSのインフルエンサーも動画・コンテンツの制作スキルを極限まで高めた人たちだ。こうして考えていくと、他者を凌駕する実績・成果を出している人は（そう見えないだけで）そのスキルを高めた人たちと言える。つまり何かに「優れている」ということは、スキルが高いことを指しているのである。

難関資格に合格したり、勉強の成績が良い人は勉強するスキルが高い人。

人よりも多く本を読める人は、本を読むスキルが高い人。

毎日走ったり、筋トレを続けられる人は運動するスキルが高い人。

こうして考えると「勉強、運動、本を読む習慣を作る」「ビジネスで成功する」ことなどは全て、スキルをどう高めるかの問題だと言える。

それだけではない。何か悩んでいること、仕事や人間関係の悩み、時間がないという悩み。こうした悩みも、スキルの問題だ。夫婦関係に悩んでいると、問題の原因はパートナー側にある。そう思えるかもしれない。しかし大抵の場合、互いにどうやってかわるか、どうコミュニケーション

をとるか。こうしたスキル不足が問題の真因であることが多い。だからこそ、世の中には夫婦関係の悩みを解決するノウハウが書かれた本が多数存在するのだ。これはノウハウを知り、実践を通してスキルを高めることができれば、問題を解決することができる。このことを示している。

こうして考えていくと、あらゆる問題は（改善する余地がある限り）スキルの問題だと理解することができる。私たちが成長したいと考えるとき、つまり、目標や夢を達成したいと考えたり、人生をより良くしたいと願うとき。考えるべき問いは「どうすれば、（そのために必要な）スキルを高めることができるか」なのだ。

全てはスキルの問題なのである。

ここまではいいだろうか。では次からは、どうすれば肝心のスキルを高めることができるのか。説明していきたい。

スキル習得は練習あるのみ？

結論からいこう。がっかりするかもしれないが、スキルを高める方法はひとつしかない。それは、地道な努力を長年にわたって続けること。これだけだ。

「なんだよ」と、この本を放り投げようと思ったかもしれない。ちょっと待ってほしい。希望はある。でもその話に入る前に、「スキルを身につけるには時間がかかる」。この真実をまず君にしつかりと理解してもらいたい。なぜなら、世の中には「早く楽に成功する方法」があまりにも溢れて

いて、この誤った情報が人々を混乱させ、絶望させている。そう私は考えているからだ。

冷静に考えてみよう。テニスやピアノを1年間必死に練習しても、プロのレベルには到達しない。このことは明らかだ。実際、1年でプロテニスプレイヤーになれるといった本は見たことがない。

一方で、世の中には「1年で1億円稼げるようになる」「半年でYouTube登録者を何十万人にする」。そう謳う本や情報で溢れている。こうしたことを達成するにはスキルを身につける必要があり、スキルを身につけるには時間がかかる。このことを理解していれば、「そんなうまい話はない」とわかるはずだ。しかし多くの人はこうしたものがスキルだと理解していない。しかも、あまりにもこうした情報が溢れているので、すぐに成功できる「裏技」がある。そう誤解してしまう。

こうした情報が100%嘘だとは言わない。実際、1年で1億円稼いだ人もいるのだろう。問題は、その背景にある「文脈」が正しく描かれていないことだ。少し前に紹介したサンドウィッチマンは2007年のM-1優勝時に散々「無名」と騒がれたが、実は2005年には当時の有名なテレビ番組「エンタの神様」に出演していた。優勝する3年前にはお笑いで飯が食える状態であり、「エンタの神様」にも優勝するときまで15回も出演していた。そう、彼らは決して無名ではなかった。伊達氏も「僕らがそれだけ無名だったら、準決勝にいた57組のほとんどは、無名タレントになっちゃうよ」と『復活力』（幻冬舎）で語っている。

こうした背景を「文脈」をカットし、各種メディアは彼らを無名と報道した。なぜか。そのほうが話としておもしろく、話題になるからだ。「1年で1億円稼げるようになる」をはじめとした、早く楽に成功できる方法が溢れる理由もこれと同じだ。そのほとんどが、肝心の背景・文脈がカットされている。

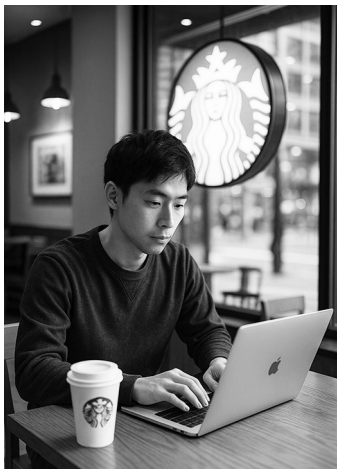
大抵の場合、そのほかのビジネスで試行錯誤を続けた経験があったり、会社員としてやってきたことが生きたりなど、成功の要因はほかにある。もしそれが何もないという人物がいれば、その成功は純粋に「運が良かっただけ」となってしまふ。1年で成功できたのは、単に高いリスクをとって、たまたまうまくいったから。それなら、ギャンブルとなら変わらない。その人物が提唱する方法には再現性がないことになる。

この話から伝えたいのは、**楽して成功する方法は存在しない**ということだ。楽して成功したいなら、ギャンブルをするしかない。高いリスクを取れば、短期間で大きいリターンが得られる可能性がある。

もしギャンブル以外の方法で成功したいなら、方法はひとつしかない。他者を凌駕するレベルまで、スキルを高めることだ。そのためにはここまで書いてきた通り、長い期間にわたって地道な努力を続けるしかない。

日本を代表する作家の吉本ばな氏も、小説を書くことについて「才能がどうか、努力がどうか、そう言う問題ではない。私は5歳くらいからずっとただただアホのように書いていた。それだけだ」と自身のメルマガで書いている。彼女は若くして作家になったが、5歳から小説を書きはじめ、ほぼ20年続けた結果プロになった。

ChatGPTを使った画像生成とイラスト化



こうしたスキルの本質を理解すると、次に解くべき問題が明らかにになる。それは「どうすれば無理なく努力を続けられるか」だ。その解を記すのが本書となる。

一方で、近年は技術革新、特にAIの進歩が凄まじい。ショートカットできる方法もあるのではないかと。少なくとも、少し先にはそうした未来が待っているのではないかと。そう感じる人もいるだろう。結論から言えば、長い期間にわたり努力を続けられる人が勝つ。この原理原則は、この先も変わらない。なぜか。理由を説明しよう。

AI時代のスキル

たしかに、今のAIはすごい。イラストや画像の生成、プログラミング、企画書の作成だけでなく、リアルかと見まごうほどの動画生成まで、その進化は留まるどころを知らない。

AIが話題になったばかりのころ、私も早速試してみた。ChatGPTを使って「スターバックスで人がパソコンで作業をしている絵を書いて」と指示すると、まるで写真のような画像がすぐに生成された。これに私の写真をいくつか提供し「人物を置き換えてマンガにして」と指示すると、これまたすぐに実現できてしまう。しかも、クオリティもびっくりするくらい高い。

はじめて見たとき、私は衝撃を受けた。それだけではなく、画像の修正も指示するだけで簡単にできてしまう。これを考えると「マンガや絵を描く」という点においては、たしかにショートカットが実現している。絵の心得がない私が、今のChatGPTと同じことをしようと思えば、相応

の練習・時間が必要となるだろう。仮にそれが1年だとすると、私は1年分の労力と時間をAIを使うことでショートカットできたことになる。

一方で、この話をもってスキルは不要⇨長い期間の地道な努力は不要、とはならない。冷静に考えてみよう。今の私がAIを使って、活躍している一流のマンガ家に対抗できるだろうか？ 間違いないくムリだ。理由はいくつかあるが、ひとつは私がAIをどんなに駆使しても、彼らの表現力に勝てないことにある。

キャラクターの表情や動きをはじめ、ひとつのコマで読者に伝えたいことを伝えるために、彼らがそのスキルを駆使してかなり細かい工夫をしていることは素人の私でもわかる。スキルがない私には、そうした「視点」がない。視点がなければ、AIに指示ができない。

もちろん今のAIは、つたない指示でも素人レベルを超えたクオリティの絵を生成してくれる。

でも、一流の人たちのような洗練的、かつ、個性的な表現に到達するのは容易ではない。そのほかにも、魅力的な物語を作る構力やストーリー全体を通した伏線の散りばめ方をはじめ、私と彼らには大きなスキルの差があるのは間違いない。そう考えると、今の私がどんなにAIを駆使しても、彼らには勝てない結論になる。

では、さらにAIが進歩したらどうなるだろう。表現力をはじめ、一流のマンガ家が習得しているスキルを、ショートカットできるレベルでAIが進化したら？ すでにその時代は来ているのかもしれない。ならば、私が彼らに勝つこともできるのではないか？ そう考える人もいるかもしれない。

結論から言えば、これもNOだ。理由は簡単。その場合、彼らも私たちと同じようにAIを使うからだ。同じ条件で**同じAIを使った勝負なら、単純にスキルが高い人が勝つことになる**。少し前にも書いたが、視点を持っていないことをAIに指示することはできないからだ。

スキルがある人は、AI活用のポイントを押さえるのも早く、かける時間も短くてすむ。だからどんなにAIが進化しても、私が努力してスキルを身につけない限り、(AIが進化して大胆にショートカットできるようになっても)一流のマンガ家に対抗することはできないことになる。

一方で、求められるスキルはAIの進化により変わることは間違いない。おそらくだが、一番重要になってくるのは**AIを使いこなすスキル**だ。AIを使いこなすスキルが低ければ、そのほかのスキルが高くて、競争に負けてしまう可能性が高い。極端な例だが、さらにAIが進化した場合、一流だがAIをあまり使えないマンガ家と、AIを使いこなす素人では、後者が前者を凌駕す

ることもありうるからだ。

では、肝心のAIを使いこなすスキルはどうやって身につけるのか。スキルである以上、時間をかけて地道に努力を続けるしかない。そう、結局はここに帰結する。ここはショートカットできない。スキルとは、そういうものだからだ。だからこそ、これができる人が競争に勝つ。この原理原則は変わらない。

AI生成の有用な指示(プロンプト)について情報発信している人も多い。確かにその通りにやれば、動画生成も簡単だ。しかし結局は、発信している人たちが先を行っているのに変わりはない。

この先、技術がさらに進化すれば多くのことが簡単にできてしまうだろう。でも、そのことでスキルが不要になるわけではない。**求められるスキルが変わっていく、ただそれだけの話**なのだ。究極的には人間が手間や時間、技術を使って行っていることをAIが完結させる。そんな時代になれば、今存在する職業の多くは消失するかもしれない。だがそのときはそのときで、今の私たちには想像できない、新しい仕事が生まれるはずだ(少なくともこれまでの技術革新ではそうだった)。

仕事が存在すれば、競争が生まれる。その差をもたらすのはスキルだ。だからどんな時代でもスキルが高い人が勝つ。つまり、**長い期間にわたって地道に努力を続けられる人が勝つ**。この原理原則は不変なのである。